

「体育哲学とは何か」に関する一考察

金 炫 勇*

A Study on “What is the Philosophy of Physical Education?”

Hyunyong Kim

Key words : 体育哲学 philosophy of physical education, 体育原理 principles of physical education, 体育とは何か what is physical education, スポーツとは何か what is sports

1. は じ め に

いま、体育やスポーツは、われわれの日常生活の中で欠かせないものとなっている。毎日マスメディアがトップ項目としてスポーツの話題や情報を取り上げており、また、さまざまな種目の競技大会やイベントが毎日どこかで開催されている。しかし、このように体育やスポーツがわれわれの生活のなかで重要な位置を占めるようになったとはいえ、現実の体育界やスポーツ界には、勝利至上主義や不祥事問題^{注1)}が後を絶たず、体育原理・体育哲学^{注2)}(体育哲学とする)が果たすべき役割は大きい。

ところが、体育において哲学は一体どのような意味があるのか。これに答えるためには、まず「体育とは何か」「スポーツとは何か」という原理論への問いが提出される¹⁾。そして、「体育哲学とは何か」という、体育哲学における根本的かつ本質的な問いを究明する必要がある。しかし、反知性的とみなされる体育と、反身体的とみなされる哲学との結びつきがはたして成立しうるのか、といった議論もあり²⁾、体育哲学の学問として確立や社会的認知については未だに進行形である。一方、Choi, E.C. (2013) は、これまでの体育学の研究動向を総括し、従来の体育学は応用科学の発達とともに生理学、医学、バイオメカニクス、栄養学、力学などの自然科学に注目してきたが、1990年代以降、体育・スポーツをめぐる勝利至上主義や不祥事問題が社会問題化していく中で、哲学の立場から体育やスポーツを見直そうとする新しい動きが目立っている³⁾と指摘している。すなわち、体育哲学は、昨今の時代の要請に答える、新たな体育哲学の構築が必要である。しかし、体育哲学は客観的方法論の乏しさが検証の大きな課題になっている。この課題を克服する方法として、日本体育学会(2006)は、「検証可能な方法論に基づいて、体育理論・体育実践の現状を批判

的に検討しつつ、『体育とは何か』という問いに『概念の同一的で不変な意味』のレベルにおいて答える必要がある⁴⁾と指摘している。また、佐藤(2006)は、体育哲学の課題を述べながら、「体育とスポーツとの概念的混同が目立ち、一般の人々のみならず、体育やスポーツの専門家にあってさえ、両者が区別されることなく混用されている現状がある⁵⁾と指摘している。つまり、「体育とは何か」「スポーツとは何か」という原理論は、体育哲学の最も主要な課題の一つであるといえよう。

そこで、本稿では、過去のさまざまな議論を見渡ししながら、「体育哲学とは何か」という原理論について究明したい。すでに提出された議論に検討を加えることは、原理論を賦活するための不可欠の作業であり、これをとおして、体育哲学が求めている新たな方向性への示唆が得られると考えられる⁶⁾。具体的に、「体育とは何か」「スポーツとは何か」「体育哲学とは何か」について究明する。そして、この三つの小課題をとおして、今日の体育哲学が果たすべき役割、今後の可能性について提起したい。

2. 体育哲学における原理論

今日体育とスポーツは、社会(マスメディアを含む)だけではなく、学校教育においても区別されず、同意語、あるいは連用語・連結語として使われている。また、日本の体育とスポーツに関連する学会である「日本体育・スポーツ哲学会(Japan Society for the Philosophy of Sport and Physical Education)」においても体育とスポーツは、連用語・連結語として捉えられているのが現状である。体育とスポーツの違いと関係を明らかにすることは、現代の体育の方向性を示すうえに大きな手がかりを与えてくれる。

* 広島文化学園短期大学保育学科

2.1 体育とスポーツの違い

まず、体育とスポーツは、どのように定義されているのかを確認する必要がある。前川（1970）は、体育の定義（definition）について、「それがどんな意味をもち、その範囲はどこまで及ぶものであり、それをこえると体育でなくなるというところを探らなければならない。それが体育現実を説明しつくすことのできるものでなければならない⁷⁾」と述べている。つまり、体育とスポーツを定義するためには、①その意味を明確にすること、②範囲・輪郭・形状などを定める必要がある。手掛かりとしてまず、辞典による「体育の定義」を確認したい。『広辞苑』によると、「(体育とは) 健全な身体の発達を促し運動能力や健康で安全な生活を営む能力を育成し、人間性を豊かにすることを目的とする教育⁸⁾」と定義されている。また『大辞林』によると、「(体育とは) スポーツ・体操などの身体活動により、健康の保持・増進と体力の向上をはかるための教育・教科⁹⁾」と定義されている。そして、『新教育学大事典』によると、「(体育とは) 身体活動（運動）を通して心身の成長・発達を促し、運動生活を充実させ、健康の維持・増進を図ろうとする教育¹⁰⁾」と定義されている。次に、辞典による「スポーツの定義」を確認したい。『広辞苑』によると、「(スポーツとは) 陸上競技・野球・テニス・水泳・ボートレースなどから登山・狩猟などにいたるまで、遊戯・競争・肉体的鍛錬の要素を含む身体運動¹¹⁾」と定義されている。また、『大辞

林』によると、「(スポーツとは) 余暇活動・競技・体力づくりのために行う身体運動¹²⁾」と定義されている。そして、『新教育学大事典』によると、「スポーツ活動自身の中に喜びや楽しさがある。やり抜いた後の満足感や汗を流した後の爽快感こそが、スポーツの真髄¹³⁾」と定義されている。上記で述べた辞典による体育とスポーツの定義をまとめると、表1のとおりである。

以上のように、辞典による体育とスポーツの定義は、辞典によって異なるものの、共通している点は、いずれも体育を教育としての機能を果たすもの、あるいは人間形成に関係するもの¹⁴⁾として捉えていることである。これに対して、スポーツは遊戯・競争・肉体的鍛錬の要素を含む身体運動としての機能を果たすものとして捉えている。これらは、体育・スポーツ学者たちによる定義を参考にしたものである。佐々木ほか（2013）¹⁵⁾や田井（2015）¹⁶⁾によれば、日本における体育とスポーツの定義は、前川峯雄¹⁷⁾、川村英男¹⁸⁾、木下秀明¹⁹⁾、佐藤臣彦²⁰⁾、大橋道雄²¹⁾などの体育学者らによって提案され、近年では、新しい議論の提案をみることはあまりないとされる²²⁾。表2は、日本の体育学者らによる体育とスポーツの定義を示したものである。

表2をみると、戦後日本における体育とスポーツの定義は、1958年に前川の著書『体育学原理』にてはじめて試みられている^{注3)}。前川（1970）は、この定義について、「オーバートイフェル（Oberteuffer, D.）が著書

表1 辞典による体育とスポーツの定義

辞典名	体育の定義	スポーツの定義
『広辞苑』	健全な身体の発達を促し運動能力や健康で安全な生活を営む能力を育成し、 <u>人間性を豊かにすることを目的とする教育</u>	陸上競技・野球・テニス・水泳・ボートレースなどから登山・狩猟などにいたるまで、 <u>遊戯・競争・肉体的鍛錬の要素を含む身体運動</u>
『大辞林』	スポーツ・体操などの身体活動により、健康の保持・増進と体力の向上をはかるための <u>教育・教科</u>	<u>余暇活動・競技・体力づくりのために行う身体運動</u>
『新教育学大事典』	身体活動（運動）を通して心身の成長・発達を促し、運動生活を充実させ、健康の維持・増進を図ろうとする <u>教育</u>	スポーツ活動自身の中に喜びや楽しさがある。やり抜いた後の満足感や汗を流した後の <u>爽快感こそが、スポーツの真髄</u>

※下線は筆者が引いたもの

表2 体育学者らによる体育とスポーツの定義

体育学者（出版年度）	体育の定義	スポーツの定義
前川峯雄（1958；1970）	身体活動を通して（手段として、媒介としてというのは同じものとみることができよう）行われる教育	試合や競争を伴うところの運動、すなわち運動競技
木下秀明（1971）	身体のための教育と運動を手段とした教育	運動、遊戯、体育
川村秀男（1985）	スポーツその他の運動が人間に及ぼす好ましい影響を期待して行う活動	現象としての身体活動、あるいは運動の様式
佐藤臣彦（1999）	単に個人が身体運動しているような場面ではなく、作用者と非作用者の教育的関係様態	体育の媒体となる実態概念。学校や教師によって利用
大橋道雄（2011）	身体活動を媒とした教育	遊戯や運動競技の系列に属する文化。体育という機能的概念を構成する独立変数の一つであり、目的・目標を達成するための媒介

『physical Education』(1951)にて定義に当たった『education through the physical』をもう一步進展させたものである²³⁾と説明している。一方、木下(1971)は、前川の定義について、「体育は身体教育であるよりも、むしろ身体を通しての教育であるというウィリアム(J. F. Williams)らが1930年代にこころみた physical education の定義に基づく。これは、それまでの体育の定義であった『身体についての教育』あるいは『身体のための教育』を否定し、かわって『身体活動による教育』あるいは『運動を手段とした教育』を体育の定義として確立させた²⁴⁾と指摘している。つまり、日本における体育とスポーツの定義は、欧米の定義を参考に、日本ならではの独自の視点を加えたものである。また、木下・川村・佐藤・大橋らの定義は、前川のものを継承したものである。さらに、近年の定義を確認しても従来の定義の軸は変わらない。友添(2016)は、体育とスポーツを次のように整理している。

体育はスポーツを教材として行われる人間形成を目的とする教育であり、一定の教育目的や教育内容を備えた教育課程に基づいて行われるものから、運動部活動のように教育活動の一環として教科外活動で行われる活動も含まれる。スポーツは独自の論理(資本の論理、自由競争の論理、平等主義の論理、禁欲的な倫理論、モダニズム)をもった、大筋活動と競争を伴った身体運動にかかわる文化であり、各民族が継承、発展させてきた踊りや健康体操などを含んだ様々な身体運動である²⁵⁾。(※下線は筆者が引いたもの)

つまり、戦後日本における体育とスポーツの定義は、体育学者たちによりさまざまな定義が試みられたものの、体育を身体、あるいは身体活動を媒介とする教育として、スポーツを遊戯あるいは競技・試合などの運動文化を媒介とする身体運動として捉え、体育をスポーツと切り離している。すなわち、日本の代表的な体育学者らは体育の本質をスポーツと一面的にとらえることに対しては、異論を持っている。さらに、体育を上位概念として、スポーツを体育の下位概念として捉える傾向がみられる。

2.2 体育・スポーツ連用語と相互関係

一方、体育とスポーツは、「体育・スポーツ」という連用語・連結語が用いられるケースが多くみられる。前川(1970)は、体育とスポーツが併用・連用されはじめた時期について、1970年前後以降、世界的に体育教育の本質や意義をめぐって、体育教育にスポーツの教育という意義をもたせるべきだという、新たな動向が生じた。そして、体育の中にスポーツを位置づけ、スポーツという文化の習得自体を目的とするようになった。そして、日本

においても「体育・スポーツ」を併用するようになった²⁶⁾と指摘している。その後、1978年11月ユネスコの第20回総会において「体育・スポーツ国際憲章(International Charter of Physical Education and Sport)」が採択され、世界の体育・スポーツの連用語・連結語の定着に甚大な影響を与えることになる。「体育・スポーツ国際憲章」では、「体育・スポーツは健全な身体と健康だけではなく、全面的で十分に均衡のとれた人間の発達に貢献する²⁷⁾と述べたうえ、体育・スポーツを「世界共通語²⁸⁾として示している。唐木(1986)²⁹⁾は、体育・スポーツの連用語・連結語の歴史的な概念の変遷を次のように整理している。①スポーツは体育の概念に含みえない内容をもっているから、両者を区別する意味で並列にせざるを得なかった。②スポーツが大衆的に普及しているので体育という上位概念だけでは全社会的な視野を確保しえなくなった。③歴史的にみれば、体育・スポーツの用語は、広範な大衆に支持されてきた体操的な発想がスポーツ的な発想に移行しつつある証拠であり、将来スポーツの一語を上位概念に採用していく事態がくることが予想される。そして、唐木は、「体育を上位概念と位置づければ、スポーツは体育のための手段ということになり、スポーツを上位関係と位置づければ、体育はスポーツの目的の一つになりかねない³⁰⁾と指摘している。このように、体育とスポーツの定義については、体育学者たちの主張と現実とズレがみられる。

2.3 スポーツ政策の動向

また、近年の国のスポーツ政策もスポーツの優勢を後押ししている。体育とスポーツの概念の変化について、日本のスポーツ政策に注目した友添・岡出(2016)は、「2010年のスポーツ立国戦略、2011年のスポーツ基本法、2012年のスポーツ基本計画、2015年のスポーツ庁創設など、文部科学省による一連のスポーツ政策が体育とスポーツの違いを紛らわしくしている³¹⁾と指摘している。また、急激に進む超高齢社会化もスポーツが体育の上位概念になることを後押ししている部分がある。2007年(21.5%)に超高齢化社会になった日本では「生涯スポーツ」という考えがさらに強まり、スポーツの喜びを体験させることを学校体育の新たな課題とする考え方が支配的になっている。特に、2011年公布された「スポーツ基本法(法律第78号)」は、日本のスポーツ政策の根幹をなすものであり、国のスポーツに対する方針や方向性がうかがえる。次は「スポーツ基本法」の「前文」の一部抜粋である。

(中略) スポーツは、次代を担う青少年の体力を向上させるとともに、他者を尊重しこれと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い、実践的な思考力や判断力を育む等人格の形成に大きな影

響を及ぼすものである。また、スポーツは、人々との交流及び地域と地域との交流を促進し、地域の一体感や活力を醸成するものであり、人間関係の希薄化等の問題を抱える地域社会の再生に寄与するものである。さらに、スポーツは、心身の健康の保持増進にも重要な役割を果たすものであり、健康で活力に満ちた長寿社会の実現に不可欠である。スポーツ選手の不断の努力は、人間の可能性の極限を追求する有意義な営みであり、こうした努力に基づく国際競技大会における日本人選手の活躍は、国民に誇りと喜び、夢と感動を与え、国民のスポーツへの関心を高めるものである。これらを通じて、スポーツは、我が国社会に活力を生み出し、国民経済の発展に広く寄与するものである。また、スポーツの国際的な交流や貢献が、国際相互理解を促進し、国際平和に大きく貢献するなど、スポーツは、我が国の国際的地位の向上にも極めて重要な役割を果たすものである³²⁾。(中略)(※下線は筆者が引いたもの)

吉田(2018)³³⁾は、「スポーツ基本法」について、三つの要素を挙げ、次のように整理している。①心身の健全な発達、健康および体力の保持増進、精神的な充足感の獲得、自立心その他の精神の涵養(目的性)、②個人・集団での実施、③運動競技、その他の身体活動(身体活動性)である。スポーツ基本法の前文をみると、スポーツは青少年の体力向上のみならず、人格形成にも役立つ教育的価値あるものと捉えている。さらに、「第七条」では、「国、独立行政法人、地方公共団体、学校、スポーツ団体及び民間事業者その他の関係者は、基本理念の実現を図るため、相互に連携を図りながら協働するよう努めなければならない」³⁴⁾としている。つまり、「スポーツ基本法」は、身体、あるいは運動文化という従来の範囲・輪郭・形状を超え、スポーツをとおした教育(人格形成)、さらに豊かな未来社会の建設まで言及しており、体育学者らが主張する体育とスポーツの定義の違いを紛らわしくしている。

社会における体育とスポーツの名称の変更に注目した出原(2016)は、「わが国はスポーツという用語の本来の語源的意味を問うことなく、『体を動かすこと』=運動をスポーツの代替用語にした」³⁵⁾と述べたうえ、新聞では体育ではなく、スポーツとして通用されている点や、2000年代から日本の体育関連大学の名称や学部名称を体育大学・体育学部からスポーツ大学、スポーツ健康科学部、健康スポーツ科学、スポーツ科学部などへと変更する大学が増加している点などを指摘している。そして、「用語や概念の違いを説明するだけでは、体育やスポーツの意味を言い当てることはできない」³⁶⁾と述べている。

ここまで、「体育とは何か」「スポーツとは何か」について、辞典等による定義、体育学者らによる定義、国の

スポーツ政策(スポーツ基本法)による定義を考察したが、体育とスポーツの意味の違いを明確にすることや、範囲・輪郭・形状の違いを定めることは極めて難しいことが明らかになった。すなわち、体育学者は、体育を身体、あるいは身体活動を媒介とする教育として、スポーツを遊戯、あるいは競技・試合などの運動文化を媒介とする身体運動として捉え、体育をスポーツと切り離していた。また、体育を上位概念、スポーツを体育の下位概念として位置づけていた。これに対して、今日の社会(マスメディアを含む)や国のスポーツ政策では、スポーツが本来の体育のもつ意味や範囲・輪郭・形状などを含んでおり、むしろスポーツが体育の上位概念となっていた。このようなズレを、体育哲学はどのように受け入れればいいのか。体育もスポーツも同じ身体文化、あるいは運動文化として、人々によってつくりあげられ、また、人々や社会の要求にしたがって、発達していくものであることを考えると、体育とスポーツの定義の変化は自然ではなかろうか。このような社会的な変化を考えると、今後体育とスポーツを切り離さず、むしろ「車の車輪のように、二つそろって一つ」と捉える、新たな考え方も必要であろう。

3. 体育哲学とは何か

そして、体育哲学とは何かについて考察する。一般的に体育は反知性的、哲学は反身体的とみなされる。体育哲学を説明するためには、まず「哲学とは何か」という問いが提出せられる。手掛かりとしてまず、辞典による哲学の定義を確認したい。『広辞苑』によると、「古代ギリシアは学問一般を意味し、近代における諸科学の分化・独立によって新カント派、論理実証主義、現象学など諸科学の基礎づけを目ざす学問。生の哲学・実存主義など世界・人生の根本原理を追求する学問となる。認識論・倫理学・存在論などを部門として含む」³⁷⁾と定義されている。また、『大辞林』によると、「①世界や人間についての知恵・原理を探求する学問。もともとは臆見や迷妄を越えた真理認識の学問一般をさしたが、次第に個別諸科学が独立し、通常これらと区別される。存在論(形而上学)、認識論(論理学)、実践論(倫理学)、感性論(美学)などの部門をもつ。②自分自身の経験などから得られた基本的考え。人生観」³⁸⁾と定義されている。また、日本体育学会(2006)によると、「あらゆる事象に批判的・分析的な眼差しを向け(現状批判、現状分析)、それらの本質を根本原則から論理的に理論化しようとする知的営為(対象の原理的構成)」³⁹⁾と定義されている。このように、辞典による哲学の定義は、辞典によって異なるものの、共通している点は、いずれも本質的諸事象を探るべき諸課題を設定し、適切な哲学的方法論を用いて、それに解答を与えていく学問として捉えている。つまり、体育哲学とは、哲学的方法を用いて体育の諸事象、特に体

育における本質的諸事象に解答を与えようとする学問である。

3.1 体育原理から体育哲学へ

学問分野としての体育哲学の制度的成立は、比較的新しく、日本では1950年に設立された日本体育学会 (Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences) が専門分科会を発足させた1955年以来、「体育原理」という名称のもとでスタートした⁴⁰⁾。そもそも、体育原理という名称は、アメリカの「principles of physical education」に基づくものである⁴¹⁾。佐藤 (2006) は、アメリカの「principles of physical education」と日本の体育原理の違いについて、「アメリカのものは体育諸科学と体育実践とを媒介する知識・知見の集合体系、いわば技術的性格を持っているのに対して、日本の体育原理は体育諸科学の成果を批判的に検討しつつ、究極的には体育とは何かという根本問題に答えようとする、まさに哲学的な学問分野としての性格を持つ」と述べている⁴²⁾。また、前川 (1970) は、体育原理の導入理由について、「戦後、体育 (あるいは保健体育) の教師になるためには、専門科目の一つとして『体育原理』の単位を修得しなければならなかったために、一般大学または教員養成大学において体育原理を教えるようになった」⁴³⁾と述べている。そして、体育原理は、今日も教員免許法施行規則の第四条 (中学校教諭) および第五条 (高等学校教諭) において、保健体育科教員免許状取得のために修得することを要する科目として位置づけられている⁴⁴⁾。つまり、戦後、体育教員養成の科目の一つとしてアメリカから導入された体育原理は、日本独自の学的形成を成し遂げている。高田 (2007) は、日本における体育原理 (今日の体育哲学) の学的形成のプロセスと特徴について、「①1960年前後に川村英男や石津誠が彼らの著書の中で体育の哲学的考察を行い、事実上はじめて体育哲学を論じた。②1970年代は、阿部忍が『体育哲学』を著し、戦後はじめて体育哲学の体系化を試みた。③1970年代から1980年代にかけては、吉澤宗吉、篠田基行、阿部忍、飯塚鉄雄、片岡暁夫らによって海外の著書の翻訳や海外の哲学的考察が紹介され、体育哲学やスポーツ哲学の論議が行われた。④1990年代は、樋口聡、瀧澤文雄、関根正美らによる哲学的研究が活発に行われ、体育原理から体育哲学へと名称変更する基盤ができた。中でも佐藤臣彦は体育哲学の名称変更に多大な功績を残した」⁴⁵⁾と整理している。

その後、2005年6月の日本体育学会総会において、「体育原理専門分科会」が「体育哲学専門分科会」と名称変更され、今日に至っている。佐藤 (2006) は、この名称変更の意義について、「長きにわたる懸案事項であり、ほぼ四半世紀にわたって折にふれ論議を積み重ねてきたが、ようやくにして実現のはこびとなった。これからの体育学における哲学的研究にとって、この名称変更は、大き

な意味を持つことになる新たな一歩であった」⁴⁶⁾と評価している。また、高田 (2007) は、名称変更に貢献した体育研究者たちについて、「彼らは従来体育原理として扱っていた研究内容のほとんどは実は本来哲学が扱うべき内容であったことを指摘したうえ、現在の体育原理は体育哲学に名称変更することが望ましいと主張した」⁴⁷⁾と述べている。つまり、従来の体育原理における研究内容は、実質的には哲学が問う内容であったという認識に基づいて体育哲学へと改称されたのである。そして、今日体育哲学は、体育学に関して日本を代表する学会である日本体育学会の14の専門分科会^{注4)}の一つとして位置づけられている。

3.2 体育哲学の研究内容

ところで、体育哲学が扱うべき内容とは何か。戦後日本の体育哲学 (当時は体育原理) を基礎づけた前川 (1970) は、体育原理 (現在の体育哲学) の研究領域について、①体育体質論 (体育とは何か)、②体育対象論 (指導とは何か)、③体育可能論 (体育をとおした教育とは何か)、④体育目標論 (体育の目標とは何か)、⑤体育内容論 (体育の目標を達成する内容は何か)、⑥体育方法論 (具体的方法とは何か)、⑦体育評価論 (評価の原理・原則とは何か) など、七つのカテゴリーを論及している⁴⁸⁾。さらに、具体的に身体、心身関係論、身体活動、オリンピック、スポーツ、カリキュラム、トレーニング、遊びなどを研究内容として取り上げている⁴⁹⁾。また、浅井ほか (1963) は、著書『体育の哲学』にて、運動文化論、体育、スポーツ、芸術、宗教、身体論、技術論、武道論、社会、科学などを取り上げている⁵⁰⁾。また、日本体育学会 (2006) は、体育哲学分野の内容として、遊び、運動形式、運動文化、オリンピズム、コーチング、三育思想、自然体育、心身関係論、身体、身体運動、身体教育、身体知、身体文化、スポーツ、スポーツ運動、スポーツ映像論、スポーツ学、スポーツ記号論、スポーツ技術、スポーツゲーム、スポーツ哲学、スポーツ美学、スポーツ文化、スポーツ文学、スポーツ理論、スポーツ倫理学、専門体育、体育、体育学、体育原理、普通体育などを取り上げている⁵¹⁾。また、友添ほか (2016) は、体育とスポーツ、運動のもつ可能性、人間形成、フェアプレイ、指導論、運動部活動、社会、宗教、政治、法・行政、環境、グローバリゼーション、ビジネス、ドーピング、ナショナリズム、勝利至上主義、オリンピズム、ルール、メディア、美しさ、コミュニティ、暴力、ジェンダー、障害者などを研究内容として取り上げている⁵²⁾。以上のように、体育哲学の研究内容は、体育・スポーツの諸事象を課題としている。また、従来の内容は、根本的かつ本質的な研究内容が多かったものの、近年はスポーツや学校体育に渦巻く諸問題も体育哲学の課題として取り上げられているのも特徴である。また、体育哲学

の研究内容をみる限り、日本体育学会の他の専門分科会、たとえば、体育史、体育社会学、発育発達、測定評価、体育方法、保健、体育科教育、スポーツ人類学、アダプテッド・スポーツなどが扱う研究領域・内容と重なるところも多くみられる。

以上のことより、体育哲学が他の専門分野とは差別される、独自のものを作り上げるためには、適切な哲学的方法論を用いて、そのあるべき本質とは何かについて究明していくことが必要であると思われる。

3.3 体育哲学の今日的意義

日本体育学会（2006）は、体育哲学の課題について、「体育の概念を論理的に構成する『体育原理』と、体育の理論的・実践的現状を批判的に分析する『体育批判』を2大課題とする」⁵³⁾と述べている。また、友添（2016）は、「（体育哲学は）スポーツや体育の現実を直視し、スポーツや体育の世界を支配する様々な諸原理（諸原則）を明確にし、それらを体系立て、批判的に検討」⁵⁴⁾しなければならないと述べたうえ、具体的にスポーツや学校体育に渦巻く諸問題、たとえば、体罰や暴力、ハラスメント行為、勝利至上主義、体育授業や運動部活動による死亡や重度の障害事故などの問題を直視し、批判的に検討していかなければならない⁵⁵⁾と指摘している。つまり、体育・スポーツを渦巻く現実問題を直視し、哲学的方法論を用いて批判するのが体育哲学の使命である。ここで、「批判」が大事なキーワードになっている。体育における批判（critique）について、日本体育学会（2006）は、「感情的、情緒的な反応である『非難』とは異なり、対象を分析することで見過ごされてきた問題点や矛盾点を明確化する知的な営みである」⁵⁶⁾と述べている。つまり、体育哲学における批判とは、否定のための否定ではなく、現状問題の真偽や善悪に対する評価や吟味⁵⁷⁾、あるいは本質的事象へ導くための批判である。ところが、上田（1964）は、「体育がかかえる難問題と正面から取り組むことこそ、体育哲学の重要な使命であり、世の中もそれを強く求めているのに、残念なことにその面での体育哲学の働きは…（中略）…現実の中に身を入れることをせず、ただ哲学のために哲学を研究することを業とする傾向が強い」⁵⁸⁾と指摘している。また、奥田ほか（1993）は、「哲学がわれわれの身体活動に何の影響も及ぼさないような知識であるなら、体育哲学は無意味なものであると指摘した上、今日の体育哲学がかかえる問題は、いまの人々が悩んでいる問題であるとはかぎらない」⁵⁹⁾と指摘している。

以上のことより、体育哲学はスポーツ界や学校体育の現実（勝利至上主義や不祥事問題など）を直視し、体育・スポーツのあるべき本質や理想的な姿について批判的に究明していくことが使命であり、そこに体育哲学の今日的意義や可能性があると考えられる。

4. ま と め

本研究は、体育哲学の新たな方向性への示唆を得るため、「体育とは何か」「スポーツとは何か」「体育哲学とは何か」という原理論について、過去のさまざまな議論を見渡しながら考察を進めた。そして、この三つの小課題をとおして、体育哲学が果たすべき役割や今後の可能性について提起した。その結果をまとめると以下のとおりである。

日本における体育やスポーツの定義は、戦後欧米のものを参考に試みられたものであった。体育を身体、あるいは身体活動を媒介とする教育として、スポーツを遊戯あるいは競技・試合などの運動文化を媒介とする身体運動として捉え、体育をスポーツと切り離していた。また、体育学者たちは体育を上位概念として、スポーツを体育の下位概念として捉える傾向がみられた。一方、今日の社会（マスメディアを含む）や国のスポーツ政策では、スポーツが本来の体育のもつ意味や範囲・輪郭・形状などを含んでおり、むしろスポーツが体育の上位概念となっていた。このような社会的な変化を考えると、今後体育とスポーツを切り離さず、むしろ「車の車輪のように、二つそろって一つ」と捉える、新たな考え方が必要である。そして、「体育哲学とは何か」について考察した。日本では1950年に設立された日本体育学会が専門分科会を発足させた1955年以来、「体育原理」という名称のもとでスタートしたが、2005年6月の日本体育学会総会において、「体育原理」は「体育哲学」と名称変更されていた。また、体育哲学の研究内容を考察した。その結果、近年スポーツや学校体育に渦巻く諸問題が体育哲学の課題として注目されていた。しかし、他の専門分科が扱う研究領域・内容と重なるところも多くみられた。そのため、体育哲学が他の専門分野とは区別される、独自のものを作り上げるためには、適切な哲学的方法論を用いて、そのあるべき本質とは何かについて究明する必要がある。また、体育哲学は、その方法論に片寄りすぎると、現実離れする危険性が高いため、常にスポーツ界や学校体育の現実を直視し、あるべき本質や理想的な姿について批判的に究明していく必要がある。

要 約

本稿では、体育哲学の新たな方向性への示唆を得るため、「体育とは何か」「スポーツとは何か」「体育哲学とは何か」という原理論について考察した。そして、この三つの小課題をとおして、体育哲学が果たすべき役割や今後の可能性について提起した。その結果をまとめると以下のとおりである。

日本における体育やスポーツの定義は、戦後欧米のものを参考に試みられたものであった。体育を身体、あるいは身体活動を媒介とする教育として捉えていた。これ

に対して、スポーツを遊戯あるいは競技・試合などの運動文化を媒介とする身体運動として捉え、体育をスポーツと切り離していた。また、体育学者たちは体育を上位概念として、スポーツを体育の下位概念として捉える傾向がみられた。一方、今日の社会や国のスポーツ政策では、スポーツが本来の体育のもつ意味や範囲・輪郭・形状などを含んでおり、むしろスポーツが体育の上位概念となっていた。また、「体育哲学とは何か」について考察した。日本における体育哲学は、1950年に設立された日本体育学会が専門分科会を発足させた1955年以来、「体育原理」という名称のもとでスタートした。そして、2005年6月の日本体育学会総会において、「体育原理」は「体育哲学」と名称変更されていた。近年の体育哲学の研究内容をみると、スポーツや学校体育に渦巻く諸問題が課題として注目されていた。しかし、他の専門分野が扱う研究領域・内容と重なることも多くみられ、体育哲学が他の専門分野とは区別される、学問としての独自のものを作り上げることが課題であった。そのため、適切な哲学的方法論を用いて、あるべき本質とは何かについて究明していく必要があると提案した。一方、体育哲学は、その方法論に片寄りすぎると、現実離れする危険性が高いため、常にスポーツ界や学校体育の現実を直視し、あるべき本質や理想的な姿について批判的に究明していく必要があり、その役割を果たすとき、体育哲学は学問分野として独立できる。

註および引用・参考文献

- 注1) スポーツの世界での暴力行為、補助金の不正受給、人種差別行為、賭博、覚せい剤使用、大麻吸引、ドーピング、八百長など、不祥事が後を絶たない。また、勝利至上主義がスポーツの世界を支配しており、今日のスポーツが主張する教育的な意味合いを高めるためには、評価の仕方に改革が求められる。
- 注2) 日本では1950年に設立された日本体育学会 (Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences) が専門分科会を発足させた1955年以来、「体育原理」という名称のもとでスタートしたが、2005年6月の日本体育学会総会において、「体育原理」は「体育哲学」と名称変更された。そのため、本研究では、体育原理・体育哲学を体育哲学として表記した。
- 注3) 日本体育学会 (2006) によると、「体育」という言葉は、日本が近代教育制度を整備していく最中の1876年、近藤鎮三によって、「精神の教育」に対する「身体教育」を意味する用語として工夫されたものである。また、わが国初の学術的な教育学書とされる伊沢修二『教育学』(1883) 巻末の「教育学用語と英対訳分類一覧」においても、「physical education」の訳語として「身体上の教育即ち体育」があげられている。(p. 567) しかし、本格的な体育の定義は、戦後になってから試みられたため、本研究では1958年の前川の定義から究明した。
- 注4) 日本体育学会は、14の専門分科会を有している。分科会として、体育哲学、体育史、体育社会学、運動生理学、

バイオメカニクス、体育経営管理、発育発達、測定評価、体育方法、保健、体育科教育、スポーツ人類学、アダプテッド・スポーツがある。

- 1) 田井健太郎、阿部悟郎、金崎太、佐々木究：体育哲学を再考する (1年目)―「体育原理論」のこれまでとこれから―、体育・スポーツ哲学研究, 35(1), 51 (2013)
- 2) 佐藤臣彦：身体論序説―アリストテレスを中心に―筑波大学博士論文, 5 (1999)
- 3) Choi, E. C.: What is Coaching? An Inquiry into Humanities-Oriented Sports Coaching, (2013), Rainbow Books, Seoul
- 4) 日本体育学会：最新スポーツ科学事典, 604 (2013), 平凡社, 東京
- 5) 佐藤臣彦：体育哲学の課題, 体育・スポーツ哲学研究, 28 (1), 5 (2006)
- 6) 1) に同じ, 52
- 7) 前川峯雄：現代保健体育学体系①体育原理, 70 (1970), 大修館書店, 東京
- 8) 新村出編：広辞苑, 1591 (1998), 岩波書店, 東京
- 9) 松村明：大辞林, 1513 (1995), 三省堂, 東京
- 10) 細谷俊夫、奥田真丈、河野重男、今野喜清編集：新教育学大事典, 4-5 (1990), 第一法規出版, 東京
- 11) 8) に同じ, 1518
- 12) 9) に同じ, 1359
- 13) 10) に同じ, 357
- 14) 7) に同じ, 70
- 15) 佐々木究、田井健太郎：「体育原理論」の批判的検討―佐藤臣彦『身体教育を哲学する』に着目して―、体育・スポーツ哲学研究, 35(1), 22 (2013)
- 16) 1) に同じ, 51
- 17) 前川峯雄：体育原理, 22 (1970) 大修館書店, 東京
- 18) 川村英男：改訂体育原理, (1985), 杏林書院, 東京
- 19) 木下秀明：日本体育史研究序説, (1971), 不昧堂出版, 東京
- 20) 佐藤臣彦：身体教育を哲学する, (1993), 北樹出版, 東京
- 21) 大橋道雄：体育哲学原論―体育・スポーツの理解に向けて―, (2011), 不昧堂出版, 東京
- 22) 1) に同じ, 51
- 23) 7) に同じ, 72: オーバートイフェル (Oberteuffer, D.) は、これをさらに詳しく The physical implies the medium through which the education takes place (physical Education, 1951, p. 2) と説明している。
- 24) 19) に同じ, 13
- 25) 友添秀則、岡出美則編著：教養としての体育原理―現代の体育・スポーツを考えるために, 3 (2016), 大修館書店, 東京
- 26) 17) に同じ, 66-80
- 27) ユネスコ体育・スポーツ国際憲章・文部科学省訳, 1978年11月21日, http://www.njsf.net/zenkoku/data/right/international_charter.pdf#search=%27E4%BD%93%E8%82%B2%E3%83%BB%E3%82%B9%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%84%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E6%86%B2%E7%AB%A0%27 (2018年8月20日現在)
- 28) 27) に同じ, 5
- 29) 唐木國彦：スポーツの概念, 体育原理専門分科会編, 12 (1986), 不昧堂出版, 東京
- 30) 29) に同じ, 16

- 31) 25) に同じ, まえがき iii
- 32) 文部科学省ホームページ, スポーツ基本法: http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm (2018年8月21日現在)
- 33) 吉田勝光: 新しいスポーツの可能性, 朝日新聞 8月23日付 (2018)
- 34) 32) に同じ, 第七条関係者相互の連帯および協働
- 35) 出原泰明: 体育とスポーツは何か違うのか, 教養としての体育原理—現代の体育・スポーツを考えるために, 20-23 (2016), 大修館書店, 東京
- 36) 35) に同じ, 24
- 37) 8) に同じ, 1831
- 38) 9) に同じ, 1753
- 39) 4) に同じ, 605
- 40) 4) に同じ, 604
- 41) 佐藤臣彦: 体育哲学の課題, 体育・スポーツ哲学研究, 28 (1), 2 (2006)
- 42) 41) に同じ, 2-3
- 43) 17) に同じ, 1
- 44) 深澤浩洋: 第2章 体育原理はどのような学問か, 教養としての体育原理—現代の体育・スポーツを考えるために, 8 (2016), 大修館書店, 東京
- 45) 高田哲史: 日本における体育哲学の学的形成に関する研究—1920年代の數川與五郎の「体育哲学」を中心に—, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第一部 (第56号), 59-60 (2007)
- 46) 41) に同じ, 1
- 47) 45) に同じ, 60
- 48) 17) に同じ, 3-7
- 49) 17) に同じ, 目次, 1-4
- 50) 浅井浅一, 川村英男, 佐々木久吉, 近藤英男, 林巖: 『体育の哲学』, 5-6 (1963), 黎明書房, 東京
- 51) 4) に同じ, 4
- 52) 25) に同じ, 目次, v-viii
- 53) 4) に同じ, 604
- 54) 25) に同じ, 5
- 55) 25) に同じ, 3-7
- 56) 4) に同じ, 604
- 57) 新村出編: 広辞苑 第六版, 2381 (2008), 岩波書店, 東京
- 58) 上田薫: 教育哲学, (1964), 誠文堂新光社, 東京
- 59) 奥田真丈, 河野重勇監修: 現代学校教育大事典, 219 (1993), ぎょうせい, 東京

Summary

The purpose of this study is to investigate “what is the philosophy of physical education?” in order to obtain suggestion for the new direction of the philosophy of physical education. Specifically, I investigated “what is physical education”, “what is sports”, “what is philosophy of physical education.” The conclusions of the study are as follows:

Definition of Physical Education and Sports in Japan was attempted by referring to those in the West after World War II. Japanese scholars regarded Physical Education as education with physical activity and Sports as a physical exercise mediated by playing games or exercise culture such as games. They separated Physical Education from Sports. Meanwhile, in today's society and the Sports policy of Japan, sports has become a superordinate concept of Physical Education. Looking at the transition of philosophy of physical education in Japan, it started under the name “the principles of physical education” since 1955. After that, at the General Meeting of Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences in June 2005, “the principles of physical education” was renamed as “philosophy of physical education”. I also examined the research contents of philosophy of physical education. As a result, various problems in sports and school physical education have been drawing attention as a subject of philosophy of physical education in recent years. However, there were many overlapping with contents handled by other research fields.

In conclusion, I proposed that it is necessary to investigate its essence by using an appropriate philosophical methodology in order to build up unique things where philosophy of physical education is distinguished from other research fields. In addition, I proposed that when philosophy of physical education is too deviated to the methodology, it becomes theoretical thing different from reality. And I also suggested that it is necessary to face the reality of the sports world and school physical education and critically investigate the essence and idea.